

ママ、きいてちょうだい

MAMA! KIITE CHOUDAI.

森岡 真央

Morioka Mao

2018年7月6日 | 金 _ 7月22日 | 日 11:00 - 19:00
月曜日休廊 / 金曜日20:00まで

ステートメント

近年制作を続けている《Component of..》シリーズは、ドローイングで描いた線と、線を始点にそこから着想される面によって制作しています。「線から面・面から線」への変換を繰り返しながら、いつしか線とも面とも言える(言えない)“イメージ”が出来上がり、そこから必要なラインを転写します。

また、イメージはそのままに、転写後も線と面の行き来は続き、いつしか面は絵の具の厚みによる“マッス”に変換していきます。

私は行為の繰り返しと事象の転換に注目しながら、日本画を制作しています。

展覧会について

本展覧会のタイトル『MAMA! KIITE CHOUDAI.』は、『きらきら星変奏曲』の副題『Ah, vous dirai-je, maman』から引用したものです。この楽曲は主題のメロディの変奏を繰り返すことによって構成されています。その様は私の現在の制作に近いものを感じました。おそらく私の主題は絵を描くことにあたり、今もその渦中にいます。

また、この『ママ、きいてちょうだい』のフレーズは、私がまだ子供であることを示唆した部分でもあります。初めて絵を描いた日のことは覚えてはいませんが、あの頃に感じた描くことの楽しさや喜びがずっと続いていて、私はまだその頃のままだということを指しています。

本展覧会では近年制作を続けている《Component of..》シリーズの新旧作品を展示します。2Fには本シリーズの初期の作品を、4Fには新作にあたる作品を展示することで、作品や取り組みへの理解を促せればと考えています。

森岡真央

C.V.

森岡真央 Morioka Mao

1993年、大阪府生まれ
2018年、嵯峨美術大学大学院 芸術研究科 芸術専攻 造形絵画 日本画分野 修了

[個展]

2018 森岡真央展(ogギャラリーeyes/大阪)

[グループ展]

2017 shu·ha·ri(京都文化博物館/京都)

2017 Tourbillon15(ogギャラリーeyes/大阪)

2017 京都学生アートオークション(京都芸術センター)

2018 嵯峨美術大学 短期大学+大学院 制作展(嵯峨美術大学/京都)

[受賞歴]

2018 嵯峨美術大学卒業生特別賞

作品について

目の前の対象と描かれたものが同一のものであったとしても、表現の仕方によっては、元の対象との間に一種の「ずれ」が生じる。「ずれ」というのは、作品の中に存在する元の対象を思わせる部分と、そこからの差異を感じさせる部分のことである。例えば、抽象化された対象と現実のずれや、異素材のものが組み合わさった材質感のずれ、近寄った時と離れて見た時の印象のずれ、など。

2017年4月より始めた本シリーズでは、作品化する上で、そういった感覚の「ずれ」を狙っている。ドローイングで書き出された線とそこから想起した面のイメージを元に制作している。書き出される線は、対象の輪郭や要素となるものを抜き出したもので、「対象との同一性と差異」の部分にあたる。

現在、構成における3つのアプローチから作品を展開している。一つは線のみで構成される作品、もう一つは線と面で構成される作品、最後に同じ対象の異なるドローイングを頂ね合わせた作品である。どの作品においてもコンセプト、制作工程は変わらず、画面構成の部分へのニュアンスの違いでシリーズの中での変化をつけている。

作品化の工程としては、ドローイングしたものをスキャンし、PC上で線の部分だけを抜き出すなどの手順を踏んでいる。工程を挟むことによって線や形に必然性が生まれてくると同時に、地と図の関係がはっきりと分かれ、初めのドローイングの頃よりもエッジが強くなる。そして整理された線や面のイメージに岩絵の具や胡粉で盛り上げるといった彩色を施している。盛り上げることによって、離れて見た時の平面的な印象から、近寄った時の画材の物質感にギャップを感じさせる。この両者のバランスを考えながら整理した線に様々な感覚の差界を盛り込むことで、画面の中にリズムが感じられる作品を目指している。

また、私が日本画材料を使う理由として、日本画で扱われる画材は個々の質感というものが他の描画材に比べて違いがあるように感じている。岩絵具と墨を比べてみても分かるように、岩絵具は粒子で墨は液体である。その上岩絵具に関しては、同じ色の絵の具であったとしても、番手(荒さ)を変えることによって質感や色味が変わり、重ねれば重ねるほど物質感を帯びる。それが線の中の一部に扱うことで、線に物質としての厚みが出来、先にも述べた、視覚的、触覚的な差異と画面の中にリズムを感じさせる部分となっている。そしてこれら全てが感覚の「ずれ」として新たなイメージを生み出す要素となることを期待している。

Q・A

- 本公募に応募した理由

単純に展示する場が欲しかったことと、PARCが移転して今のスペースになったことが大きいです。個人的に以前よりも展示空間が想像しやすかったです。

- 今回の展覧会について

これまでの私の制作は個々の作品はバランスや相性では関連付けられても、イメージの羅列で終わっていたと思います。なので作品タイトルもナンバリングするのみでした。しかし、今回ははじめて展覧会として作品を制作しました。私自身も見えてこな

かった作品同士の物語が少し現れてきたんじゃないかなと思います。

- 本展の目論見・挑戦・希望など

「新しいことをしている」という自覚をもって制作したことです。シリーズ作品なのでベースはあります。それは制作する上で安定に繋がりますが、そんなのつまらないですし、また「こいつ変わった」と思わせたいです。その方が私自身が楽しいので。私はやっぱり子どもなんです。だから「楽しい」はかなり大きな原動力です。

- 現在の素材・技法はどのような理由で選択しましたか

オープンキャンパスで初めて岩絵具を見ました。絵の具になる前の原材料の状態も。これまで絵の具はチューブに入った状態のものという認識が変わりました。「なぜ日本画なんですか?」とか「なぜ岩絵具を使うんですか?」という質問に、色々それっぽい理由はつけられますがやっぱり単純に面白いし綺麗だと思うからです。

- これまでの作品に通底する問題意識や興味は

絵を描くこと全般に対して興味はあります。でもその中で「もの」を見て描くことが制作のキーワードでもある「同一性と差異」に繋がっています。私は「もの」を見てしか絵が描けないですが、それは日本画を学ぶ中で取り組んできた写生の影響が強いと思います。その中で想像で絵を描くことに対してリアリティや実感が持てなくなりました。けれど、それは悪いことではないと思っています。むしろ現在の制作につながる手がかりとして、私にとって良い方向に繋がったと思います。また私は対象の再現率(再現性)を問うてはいません。「見て描いてもずれる」ことこそが絵の醍醐味かなと思います。

- 作品をつくることはどういうことか

時間が形になることだと思います。

- 作品を見せることはどういうことか

空間をコーディネートすることです。

- 魅かれるものは何か

ミーハーなので何でも惹かれるんですけど、私の勝手な解釈になりますが誠実なものに惹かれます。

- 見たいものは何か

もっと広くて遠いところに行きたいです。どこかはわかりませんが。

- 現在の自身の問題点などあれば教えてください。

たくさんあります。私は知らないことが多いです。美術においても普通の生活においても。私の中にあるものを増やしたいです。

- 何が美しいか

誠実なもの

- 何が醜いか

無責任なもの

- 何がカッコいいか

わくわくできるもの

- 何がカッコわるいか

なよってした感じです

- 何を望んでいるか

作品が残ること

- 何を求めているか

求められること

- 何を恐れているか

感覚が鈍くなること

- これから何をしたいか

もっとたくさん制作したいです。